

良寛を敬慕したキリスト者たち

竹 中 正 夫

はじめに

小倉章蔵（1884—1964）は、岡山県高梁に生まれ、高梁中学で学び、暫く小学校訓導をつとめたのち東京音楽学校で学び卒業後、順正高等女学校の音楽教師をつとめた人である。祖母（友）の信仰をうけついで1904（明治37）年20歳のとき高梁教会で洗礼をうけ、生涯キリスト教の信仰に立って教会生活を守るとともに、平信徒として随所で伝道にあたった。彼は、音楽と共に書画を愛好し、堇雨と号して自ら筆をとって自作の和歌や詩にあわせて絵を描いて楽しんでいた。



小 倉 章 蔵

彼は、頭はいつも丸刈にしていた。そのために、月に四回は床屋に行っていたというから、決して経費節減にはならなかったが、さっぱりとした素朴さを愛好していた。晩年は、ほとんど和服ですごしていたので、お寺の坊さんと間違えられることも少くなかった。彼は、キリスト者として、真実を求めて旅に出た日本の先人たちに関心をもち、なかでも、芭蕉、西行、良寛などの生きざまを敬慕していた。小倉章蔵が残した数多くの書画の作品のなかには、西行の竹にかかわるものがある。彼は竹の絵を描いて、西行のうたを併記している。

竹の色も君の緑に そめられて
いくよともなくひさしかるべし

章蔵が西行や良寛を愛したのは、キリストの道を去って彼らに従ったというのではなかった。むしろ、日本人として、この国に伝わる精神的遺産を携えてキリストに従ったといってよい。小倉章蔵は、生涯のおわりまで聖書に根ざしたキリスト教の信仰をもっていた。彼にとっては、キリストはかけがえのない存在であった。そして、キリストを讃美するにあたって、日本のメロディで讃美をうたい、日本の水墨でそのメッセージを描き、日本の土からつくられた器に、生命の水をもろうとした。



小倉章蔵筆 西行の歌

触発のおもい

かつて、同志社大学において、教会史を講じた魚木忠一教授は、キリスト教精神史の流れをとらえるにあたって類型論の方法をとり、それぞれの異った文化的・社会的状況に生きる人びとと福音との出あいを分類、整理して、その特色を把握しようとした。彼は触発ということばを用いて、キリスト者と特定の文化との出あいをあらわそうとした¹⁾。彼は触発についてこうのべている。

触発とは、何物かに触れて啓発されることであって、茲には教師の教説、行為、乃至は經典を契機として求道者の宗教的精神が発展することを意味して居る。基督教の伝道は触発であるべく、教化とは触発によって果を結ぶことである。触発ということなしに、全く受身的に模倣して習得した基督教は、靈の宗教でも、真の基督教でもない²⁾。

彼は、ベルリン大学において教義史を講じたラインホルド・ゼーベルグがあげた、五つの類型（ギリシャ、ラテン、ゲルマン、ローマ、アングロ・サクソン）に、日本類型を加え、日本におけるキリスト者の触発体験の吟味を行っている。

本来、キリスト者は、それぞれの固有な時代と状況の中で生きており、真空的な場でキリストと出あうのではない。日本の社会的・文化的な場において、福音に触発して生きることが、日本のキリスト者の課題である。それは、日本の思想や文化を無批判にうけいれて、キリスト教と結ぼうとするものではない。また、かつての戦時中の日本的キリスト教によって提唱されたような、国家主義的な考えに、キリスト教を迎合させるものではない。国家であれ、思想であれ、所詮それは、人間の営みの所産であり、相対的なものであり、それらを絶対化することは出来ない。わたしたちは、つねに人間の業のむなしさを謙虚にうけいれるとともに、それぞれのおかれた場におけるふさわしい生き方を探求することが肝要である。わたしたちは、長い歴史をもつ西欧のキリスト教に学ぶところが少くない。しかし、宗教的精神は模倣によって活力あるものとはならない。西欧のキリスト者が、自分たちのおかれていたそれぞれの文化的・社会的状況の中でキリストに従ったように、日本の文化的・社会的状況の中で信従の道を見出すことがこの国のキリスト者の課題であろう。さきにあげた、魚木忠一教授は、日本の文化的状況の中でキリスト教の福音に触発して生きた人の一人として牧師難波宣太郎をとりあげその遺稿を編集刊行している³⁾。こうした流れを吸む日本のキリスト者の一人として、わたしは、小倉章蔵を考えることが出来ると思う。

良寛を慕ったキリスト者たち

良寛を敬慕したキリスト者は、小倉章蔵だけではなかった。良寛と同じ越後の出身の大宮季貞やその友人たちをあげることが出来る。大宮季貞は1866（慶応2）年1月26日、越後、与板藩の医師の家に生まれ、1883（明治16）年、京

都同志社に学び、在学中、明治15年4月9日、京都第一公会でD・W・ラーネッドから洗礼をうけ、1888（明治21）年に結婚した。それまでは、貞之助といていたが、翌1889年から季貞と改名した。同志社を卒業したのち、「北越伝道は北越人自らあたるべし」という信念をもって、1890年から長岡教会第五代牧師として雪深い越後の地で伝道、牧会にあたった。ついで、1894年から1900年まで6年にわたって、新潟教会の第五代牧師として尽力、新潟教会の歴代牧師中の数少ない新潟県出身の教職であった。⁴⁾その後、アメリカン・ボードの宣教師、H・B・ニューウェルの働きを助けたり、『北越評論』の編集を担当したりした。1904年から同志社時代の恩師ラーネッドの助手として京都に移り、新約聖書講解、同改訳版、教会史などの龐大なラーネッドの著作の筆録をなし、その巻数は25巻、頁数は14,136頁に及んだ。その間、1910（明治43）年10月按手礼をうけ、今出川講義所（現洛北教会）を助けた。1938年に引退し、余生を大阪で過し、1944（昭和19）年1月に78歳で永眠した。⁶⁾

従来から大宮季貞については、龐大な量に及ぶラーネッドの著作の筆録者として知られていた。しかし、最近の研究によって彼が新潟県人として新潟伝道に打ちこんだ貴重な足跡が明らかにされた。周知のように新島襄の晩年の書簡にはくり返し、くり返し、新潟伝道の重要性がのべられている。彼は、当時新潟伝道にあたっていた広津友信からおくられてきた新潟県の地図を拡げ、県下の町名をあげて、新潟地方の伝道の推進を力説している。新潟伝道は、いわば新島襄の悲願であった。越後の与板に生を受けた者として、大宮季貞の胸中には、この新島襄の畢生の悲願がこだましていたにちがいない。最近出された二つの教会史は、大宮季貞の新潟伝道の姿をうきばりにしている。一つは、『長岡教会百年史』（西八条敬洪、本井康博編、1988年）であり、もう一つは、『写真で見る新潟教会の歩み』（本井康博編、1988年）である。そこには、彼のねばり強い新潟地方の伝道の足跡が記録されている。⁷⁾

さらに近年、与板の教育長をつとめられた石黒秀一氏によって、大宮季貞が良寛を敬慕し、キリスト者として良寛の足跡を辿ると共に、その歌集・詩集を

編集したことが紹介された⁸⁾。それによると、季貞は伝道のかたわら、良寛の歌や詩を集め、丹念に分類、整理して、二冊の書物にまとめて出版している。

『沙門良寛和歌集』 警醒社、明治41年

序文24頁、口絵5頁、小伝10頁、和歌集185頁、附録7頁、計231頁。

『沙門良寛詩集全』 翠山堂、大正7年

序10頁、口絵2頁、本文87頁、追加21頁、計120頁。

とりわけ『和歌集』は、「大宮本」または、「季本」として、良寛研究史においても、貴重な文献として評価されている。大宮季貞の良寛に寄せたおもいは、キリスト教界では殆んど知られず、良寛研究の分野では先人として挙げられながら、その人物誌は不明のままにおかれていた。いわば、良寛を慕ったキリスト者大宮季貞のおもいは、越後の深い雪の下に長い間埋もれていたといえよう。

さて、『和歌集』には、短歌が春夏秋冬雑に分類され、485首、長歌30首、旋頭歌10首、附録として俗謡2首、俳諧13句、韻文2章を含み、231頁にわたるもので、未だ良寛についての世人の関心が今日のように広がっていなかった明治末期にこのような書物を出版することは、並大抵のことではなかったように思う。出版を引きうけた警醒社は、群馬県安中出身の湯浅治郎が福永文之助をたすけて1883（明治16）年に設立したキリスト教の出版社であった。『和歌集』が出版されたころ、安中教会の牧師は、柏木義円であり、彼は与板の西光寺九代住職であった人であり、大宮家とは、親戚関係にあった。彼は、非戦論をとなえ、かつ、社会主義の研究を、キリスト者としてすすめた人として近年とみに注目されているが、終生日本の文化的伝統を身につけた和服のキリスト者であったことも忘れてはならない。湯浅治郎や柏木義円などが大宮貞季の良寛研究に励ましを与えていたことが推察される。

興味深いことは、この『沙門良寛和歌集』の序を三輪源造と長坂鑑次郎の二人が寄稿していることである。

三輪源造と良寛

三輪源造（1871—1946）は大宮季貞と同じく与板出身で、兄や妹たちとともに初期の同志社で学び、1886（明治19）年6月20日に京都第2公会で洗礼をうけ、1899年同志社神学校を卒業し、松山女学校（現松山東雲学園）、横浜共立女学校で教鞭をとったのち、同志社普通学校および大学予科および、女子専門学校で国語、国文学を約30年教え、1946年永眠した。詩情にとんだ文学的才能を評価されて、讃美歌委員会の一員として讃美歌の編纂に尽力し、自ら讃美歌の作詩をなし、現行讃美歌には、彼の作詞になるものが含まれている。それらは「羊はねむれり」（119番）、「きかずや明星」（412番）「この世は花園」（466番）の三点で、いずれも日本的な優雅な叙情をもった歌詞であり多くの人びとによって愛唱されているものである。また、同志社大学の卒業式で今もうたわれている、送別の歌「春の調べの鶯よ」も彼の作詞によるものである。

三輪源造は、大宮の『和歌集』に「詩僧良寛」と題して序文を寄せて、そのなかでにこうのべている。

庵中手桶なく、盥なく、唯一個の摺鉢ありしのみ。これにて味噌をすり、顔を洗ひまた泥にまみれし足をも濺ぎてさても便よきものよと悦び、床下に生せし筍をいたはりては、畳を揚げ、板を引剥ぎて室内に茂らしめ、火葬場に棄てられし古椀を拾ひ来りて客を饗し、さらでも物なき庵中に忍び入りたる賊の、何をがなとしきりに探りまはるを憫みて、そぞ驚さむはこゝろなしとて、息を凝らして黙したるなど、何ぞそれ一見枯木死灰の行者の如く、酒々脱落の奇人に似たるの甚しき。然も誰か知む其胸底に万斛の涙を湛へ、抑へ難き熱情の燻れるものありしを。

彼は、良寛、西行、ワーズワースの三人を自然詩人とよび、彼らが心豊かに

自然と共に生きたことを指摘し、

春の野にすみれつみつゝ 鉢の子を

わすれてぞこし あわれ鉢のこ

のうたを引用してつぎのことばで序文を結んでいる。

春の野に堇を摘みては、わが蜉蝣の身を托せる、鉢の子をも置き忘れたり。即ち其鉢の子の中に、我をも、禅をも、仏をも、忘れ来るなり。あゝ彼はつひに真の自然詩人にこそありけれ。

人の書を師に請ふや、繡毬を多く贈れば、欣然として直に筆を執りたりとか。こもまた自然なり。誠に彼の一生は、自然の子としての一生なりしなり。我はこゝに再び五合庵の句を記して筆を擱かむ。

たくほどは風がもてくる五合庵

明治40年 水無月5日樟の若葉かけにて

三輪花影しるす

長坂鑒次郎の良寛観

もう一人の序文の執筆者である長坂鑒次郎(1871—1962)は、高崎の出身で、1886年4月高崎教会で星野光多から洗礼をうけ、同志社神学校を卒業後、新潟地方の伝道にあたったのち、神戸女学院、神戸女子神学校、さらに聖和女子学院で教鞭をとった。この間、岡山教会で牧会にあたり、詩的な表現をもって説教をなした詩人牧師であった。彼も讃美歌を作詩し、現行讃美歌に含まれている、「行けどもゆけども ただ砂原」(244番)は、彼の80歳のときの作である。

長坂は、大宮の求めに応じて、詩的な文章を序文として書きおくっている。三輪が序文において良寛を自然詩人としてとらえたのに対し、長坂は、良寛の魅力をその人格の秘密としてとらえている。その序文は詩人牧師長坂鑒次郎の姿を躍如として伝えている。

良寛和歌集序

自然人生ともに秘密の多きがなかに、人格といふ者ほど深き秘密はあらざるべし、斯くて大なる人格は即ち大なる秘密といって可なり、沙門良寛は一個の大人格なり、故に又一個の大秘密なり、彼は歌を詠み、詩を作り、且つ書を能くす、而して之等は皆天真の流露にして、形式の世界を脱する者也、彼自ら語って曰く、我は詩人の詩と、歌人の歌と、料理屋の料理を好まずと、以てその人物を察すべきなり。

彼は宗教家なり、されど世の所謂宗教家にあらず、彼が経文に通ずること頗る深きを聞けど、かの何万卷を読み破りしとて誇るを好む学者流にてはあらざるなり、彼が道念甚だ高しと伝ふれど、かの勧善懲惡を弄する道学先生の嗅味は聊もあらざるなり、彼は果して仏者なりしか、形式よりいへば即ち然らん、彼は越後国上山、五合庵に瞑想を凝らしたる禅僧なり、然れどもその真相はいかん、彼が情に厚くして行動の自由勝手なりし所を察すれば、到底通常の意味にて仏者といふを得べきや、蓋し一個の疑問といふべし。

思ふに彼はカーライルの所謂「大人」にして「誠意」を以て自然と人世を觀察し、その真相を認め、その實在に触れたる人物ならん。

彼は書を著さず、その詩歌を集めんとせず、唯だ人の請ふがまゝに時に一首を認め、折に一句を記せしと聞く、彼は記憶するまゝに胸に浮ぶがまゝに書して与へしものなれば、同じ詩歌も請ひたる人によりて多少異なる者すらあるなり、而も彼は斯る事に心をとめんとせず、真に悠々自適の生涯を送りたり、然れど実力のある所感動あり、彼が言行はいつしか近在近郷に伝はり、多くの人の記憶する所となり、数10年の久しきに至りて愈よ世に喧しからんとす、彼の文芸の徒が所謂苦心の名作も数年にして跡を絶つ世に、自然にこぼれたる此の一寒僧の言句が後世に至て益々現れんとし来るは、真に人世の一大不思議といはずして何ぞや。

大宮兄観る所あり、良寛を研究する事既に十数年、今先ずその歌集を編して世に公にせんとす、心ある者之を味はば、彼が深遠なる人格と、彼に因り

て顕されたる人世と、自然の或者に接触して、必ずや讃嘆措く能はざるものあらん。

明治40年6月中旬

神戸女学院

長坂鑒次郎

大宮季貞と良寛

さて、大宮季貞は、同書に大宮露月子のペンネームで序文を寄せ、自分が良寛を敬慕するようになったいきさつをつぎのように記している。

予は、幼稚の頃から良寛の名を常に祖父母の口より聞き慣れたのだが、併し良寛を真に敬慕するに至ったのは、今より17、8年前からである。^{〔かれ〕}渠が詩歌を誦し、その筆跡に接するに随ひ、愈々敬慕の念が生じ、増々その人格の崇高なる事が解って来たのである。

良寛が世を去ったのは、1831（天保2）年であり、大宮季貞の祖母トキは、その翌年に生れている。良寛の父、山本以南は、自ら俳諧をたのしみ、自らさすらいの旅に出た人で、良寛に深い影響を及ぼした。以南はもと与板町新木家の次男で新之助といい、21歳のときに、出雲崎の山本家に入婿として入籍した。与板は良寛にとっては、懐しい父の出身地であり、しばしば足を運んでおり、与板の人びとは、祖父母から子に、子から孫へと良寛の足跡を語り伝えていたにちがいない。

大宮季貞は、キリスト者として良寛を敬慕し、良寛に学びながらキリスト者として生きつづけた。彼は、その点についてこう記している。

今の世の普通の常識よりいふと、良寛は仏僧であり、予は基督教の教役者¹⁰⁾である。それで鳥渡怪訝^{ちよつと}の感を起す人があるかも知れぬ。然るに予が良寛を

敬慕するまでに至った理由は寧ろ基督教徒であるからで、若し予が基督教徒でなかったならば、斯くまでに良寛を敬慕する事はなからうと思う。

とのべ、良寛が自然のなかにある生命をいつくしみ、嬰兒の如く、天真爛漫の人であったことを評価している。彼は、良寛を単に同郷の先輩として親近感を抱いていたのみでなく、その生きざまにおいて感銘するものがあつた。そこには、キリストが、野の花や空の鳥を指さして、それらをはぐくみ育てている天の恵みに委ねて生きる道をといた姿に相通ずるものがあつた。『和歌集』の序文に彼はこう記している。

良寛は実に自然の子である。子が自然の子という意義は、決して山出しの疎野とか解らず屋という訳でない。キリストの所謂天国民の譬喩として使用された嬰兒の如きだからである。即ち良寛は天真爛漫の人であつて、実に渠（か）れ自ら柔和謙遜従順である所が恰かも嬰兒の如きであつたといふ許でなく、渠はまたその天真爛漫の児童を愛したのである。若し良寛が時を同ふしてキリストに見えたならば、バプテスマのヨハネの賞讃された如く、「婦の生たる者の中いまだこれより大なる者は起らざりき」といはるゝに相違ない。

抑も良寛は畸僧として一般に意はれてをるが、併し渠は決して努て奇を衒つたのでなく、自然であつたので、実は世間が寧ろ畸であつて、渠は決して畸ではなかつたので、それで渠は世の所謂禅僧の如く無味ではなかつたのである。¹¹⁾

大宮季貞は『和歌集』を出してから10年ほどして『沙門良寛詩集』を編集刊行した。1904（明治37）年から大宮は京都今出川講義所の伝道師をつとめ辛棒づよくラーネットの著書の邦訳にあたっていた。ちなみに、当時の彼の住居は京都府愛宕郡上加茂字小山惣ノ下26—3であつた。さきの『和歌集』が東京の警醒社から刊行されたのに対し、『詩集』は、京都市二条通河原町角の翠山堂

で印刷、出版されている。大宮は、その印刷に可成り手間どったばかりでなく「誤謬と社撰の箇所が甚だ多いので不満足に至りである。この遺憾千万なる点に対しては、近き将来に於て即ち再版の場合に際し大に訂正を加ふる事を期するのである¹²⁾」とのべている。実際は同書は、再版されなかったのでわれわれは、誤謬の訂正箇所をつまびらかにすることが出来ないが、大宮がいかに誠実に良寛の詩集の編纂の仕事にあたったかということを物語っている。

大宮の編集した『沙門良寛詩集』をみると、まず巻頭に京都の友人小野良毅の序をかかけ自ら大宮謙斉の号を以て序文を認めたのち、8頁にわたって「沙門良寛小伝」を記している。彼は、良寛の詩を「五言古詩」、「五言律体」「五言絶句」「七言古詩」「七言絶句」「偈讃」「法華讃」「追加」の項目に分けて編集している。彼は序文において、良寛を自然に同化した人としてつぎのようにのべている。

自然に同化した人物に接する時は、恰も自然の風光に接した如き心地がする。良寛は実に自然に同化した人である。故に渠には何等の野心もなければ又覇気もない。而して渠は曹洞宗に属しながらも敢て同宗派の人に限って交際したのではない。即ち渠が終焉の地たる嶋崎村の木村家は真宗派であって、渠の墓塋も同村隆泉寺境内木村家累代の墓地にある。

渠の交友中には神道家たる新津の桂家もあれば、儒者たる鈴木文台翁もある。特に渠が久しく居住してをった五合庵は真言宗国上寺に属する国上山の中腹にあったのである。斯の如く渠は宗派を超越してをったので、敢て地位を需めるの考もなければ、もとより肉次の満足を欲するものでなかった。ただ渠は仏恩に謝する外は天地自然に親んで悠々自適七十有余年の生涯を送ったので、この自然に同化した所に、渠は真の自由、誠の真善美を発見したのである¹³⁾。

大宮は、自分は詩歌の専門家でないが、和歌集につづいて詩集の編集・出版を企画したのは「ただ良寛禅師の人格を敬慕するの余り、広く天下に一日も速に紹介せんとする微衷に外ならぬのである。¹⁴⁾」とのべている。

大宮が残した良寛についての二つの書物（『和歌集』と『詩集全』）は、良寛研究史において貴重な意味をもっているといわれている。そこには、二つの理由がある。第一の理由は、時代からみて、これらは顕著なことである。明治41年に『和歌集』、大正7年に『詩集全』を出したということは、可成り早い時代に良寛の作品を丹念にあつめ、味読し出版したことを物語っている。谷川敏明氏の編集による『良寛伝記・年譜・文献目録』¹⁵⁾によると、良寛の詩歌が集められて本格的に刊行されたのは、大正7年以降のことである。同年には、大宮の『詩集全』が2月20日に出版されたのをはじめ、相馬御風の『良寛和尚詩歌集』（289頁）『大愚良寛』（443頁）、玉木礼吉『良寛全集』（329頁）などが相続いて出版されている。大宮の『和歌集』が明治41年に出版されているが、それ以前の明治期の良寛のまとまった詩歌集としては、村山半牧『僧良寛歌集』（明治5年、36頁）、小林二郎『僧良寛上人詩集全』（明治10年、68頁）、小林二郎『僧良寛歌集』（明治35年、123頁）などがみられるが、序文などをあわせると231頁に及ぶ和歌集を大宮が編集刊行したことは注目すべきことである。大宮季貞は、その序文において、『歌集』編集の動機についてつぎのようにのべている。

然るに北越人士をはじめ一般世間は良寛を以て一個の痴僧、一個の乞食僧、一個の畸僧としてのみ見てをるので、未だこの高僧、この真詩人、この能書家の真価を識るものが少ないのである。故に予は不肖をもちへりみず、この良寛を世に紹介せん事をつとむるもので、今その紹介の一着手として多年蒐集した渠が和歌集を出版するのである。尤も^{【老】}囊に新潟の書肆小林二郎の出版にかかる『僧良寛和歌集』といへる二種のものがある。然れとも今回予が出版せんとするものはなほ凡そ百首の増加をなしてをるのである。一体良寛は詩歌の草稿をとどめないで、ただをりにふれた時に感じた紙片に書き

散したに過ぎないのである。故に同一の詩歌であっても多少その語句を異にするものがある。其上未だ散逸してをるものも多くあり、また誤謬の点も少なくあるまいから、なほ将来を期して訂正増補につとむる考である。¹⁶⁾

大宮の『詩歌集』において第二に注目されることは、かれは冒頭に、彼が所蔵する良寛の八点の作品の写真をかかっていることである。それらは、「手毬をよめる」と題する長歌、和歌（色紙）「きてみれば わかふるさとはあれにけり、にはもまかきもおちのはして」、和歌（短冊）、「風は清し月はさやけし いさともに おとりあかさむおいのなこりに」をはじめ、のちの良寛研究にきわめて重要なものであった。

円通寺への寄与

大宮季貞の良寛に寄せるおもいは、『和歌集』『詩集』の編集、出版にとどまらなかった。良寛の書がいかに読解しがたいものであるかは広く知られてい¹⁷⁾る。それらを丹念によんで、吟味を加え、分類整理して出版したことには、並々ならぬおもいをうかがい知ることが出来る。

さらに、大宮は、自らが所蔵していた良寛の書仮名手毬歌を遠く円通寺をたずね寄進している。それは、1919（大正8）年4月のことであった。それは、『詩集』刊行の翌年で、一仕事終えた感謝のおもいがこめられていたものと思われる。円通寺にある。「手毬歌」の箱書きにはつぎのように記されている。

諸用のため京都より岡山に来る。兼ての宿望なりし良寛禅師の修行の地、玉島円通寺に詣で禅師の長歌一幅を記念として寄贈するものなり

大正8年4月 ¹⁸⁾大宮季貞

良寛は越後、出雲崎の橘屋という名主の家の長男として生れ、18歳で出家し、22歳のとき、たまたま越後に来た玉島の円通寺の国仙和尚の徳を慕って随

行し玉島に赴き、十数年の間修業に励んだ。大宮は、円通寺を訪ね、愛蔵していた良寛の通常「手毬歌」といわれる「あづさゆみのうた」を献納した。

あづささゆみのうた（円通寺所蔵）

あづさゆみ 春さり来れば 飯乞ふと 里にい行けば 里こども 道のち
またに 手まりつく われもまじりぬ そがなかに ひふみよいむな 汝
がつけば 我がうたひ わがうたへば 汝はつき つきてうたひて 霞立
つ 永き春日を 暮しつるかも 霞立つながき春日を子供らと 手まりつ
きつ この日暮しつ

大宮はこのとき、良寛参禅記念碑建設の計画をきき、その実現のために尽力している。さらに、大宮は同郷越後の友人で良寛を慕っていた田代亮介を紹介した。田代は新潟県柏崎の医師で、大隅重信の知遇を得て中国に渡り、同仁病院を創設して理事をつとめたりした。大宮とは、同郷のよしみにあわせて二人とも良寛を慕う仲であった。大宮のすすめが機縁となって、田代は大正12年に所蔵していた良寛遺墨12点を円通寺に寄進したのみでなく、記念碑建立の資金募集のために東奔西走して寄与した。今日円通寺公園の一隅に良寛記念詩碑がある。これは、1931年に建立され、高さ5.5メートル、幅2.6メートルあり、碑の右には、田代亮介が寄贈した「自来円通寺」の原本が拡大されて刻まれ、左には、漢詩人であり書家であった柚木玉郷（1865—1943）が良寛の略伝を誌している。田代亮介は、この詩碑完成後も良寛堂に起居をして生涯を完了しようとしたが、病におかれ、東京に移り、1933（明治8）年2月9日、69歳で永眠した。¹⁹⁾

その詩碑に記されている良寛の「自来円通寺」の詩を左記しておく。

自来円通寺 円通寺に来てより
不知幾春冬 幾春冬なるかを知らず

門前千家邑	門前千家のむら
更不知一人	さらに一人を知らず
衣垢手自洗	衣垢つけば手みずから洗い
食尽出城闕	食尽くれば城闕に出ず
曾讀高僧伝	曾て高僧伝を読む
僧伽可清貧	僧は清貧を可とすべし

今日、円通寺を訪れる人にとって、まず目にとまるこの詩碑の背後には、良寛を敬慕した田代亮介と大宮季貞という二人の越後人の友情の輪のあったことを想起するのである。

小倉章蔵と良寛

小倉章蔵は、キリスト者として良寛を慕い、良寛に学び、培ったところをもってキリストに従うようにつとめた。彼の残した蔵書のなかにいくつかの良寛についての書物がある。また遺稿のなかには、良寛に触れたものが少ない。それらのなかから、彼は良寛のどのような点に心ひかれたのか、そして、キリスト者としてどのように良寛をとらえたかについて吟味してみることにする。

先づ彼の書画の中で、良寛にちなんだものを三つあげておくことにする。

玄冬十一月	玄冬十一月
雨雪正霏々	雨雪まさに霏々たり



小倉章蔵筆 玄冬の詩

千山同一色	千山同じく一色
萬徑人行稀	^{ばんけい} 万径人の行くこと稀なり
昔遊総作夢	^{せきゆう} 昔遊総て ^な 夢と作り
草門深掩扉	草門深く扉を掩ふ
終夜燒櫓柵	終夜 ^{こうとつ} 櫓柵を焼き
静讀古人詩	静かに古人の詩を読む

この作品は、良寛が玉島の円通寺における修業を了えて、諸国をめぐる越後に帰り、五合庵にこもった時のものであろう。五合庵は、国上山の頂上にある真言宗国上寺の草庵で「毎日粗米五合を寄せ頭陀の労を扶く」というところから名づけられた素朴な草庵であった。20年、夢にまでみた故郷の姿は、昔日の面影はなく、哀愁のおもいを禁じ得なかったことであろう。

母去って悠々父亦去る 懐愴哀婉何ぞ頻々たる
 水茎のあとと涙にかすみけり ありし昔のことを思へば²¹⁾

こうした中で、彼は五合庵に冬ごもりする彼の心境をえがいたのがさきの詩である。

万物は蕭々と枯れはて、厳冬となって 水をふくんだ雪が間断なくしんと降りつもり、山全体が一色におおわれている。どの^{みち}径も往来する人は殆んどない。昔日の想い出は夢のように思われ、訪ねる人もなく門は深く閉ざされている。静寂の中に深夜木ぎれをもやし 古人の詩を口ずさむ

良寛の詩には、音が底辺に流れている。唐木順三は、良寛における「聞く」ことの意味を指摘している。²²⁾彼は自然の琴のかもしれない出す音を自己の琴線にこだまさせた人であった。良寛の詩には、「唯聞く、落葉の^{しきり}頻なるを」とか、「遠

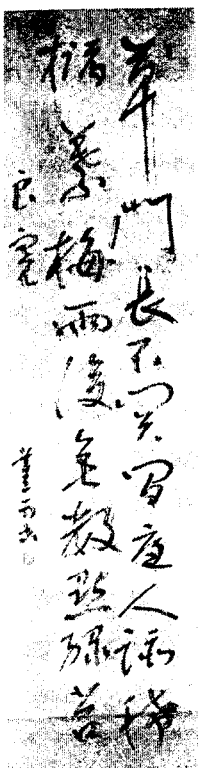
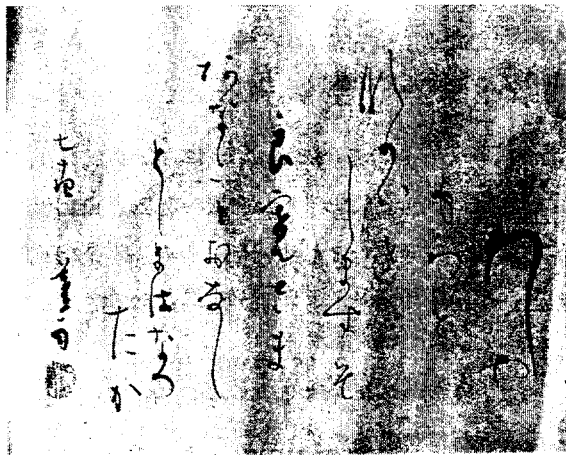
山、暮鐘の声」あるいは、「只聞く、遠溪の声」などの表現が少くない。「聞きとどめ」の表現は、芭蕉の句にもみられるところであり、日本文化の一つの特色とみなされている。さきの「玄冬」のうたにも、しんしんと降りそそぐ雪の音、ばちばちと燃える薪の音が夜のしじまの深さをあらわし、その中に古人の詩がこだましている。音楽家であった小倉章蔵は、こうした音の表現に敏感であったと思う。

草門長不関	草門は長くとざされ
間庭人跡稀	中庭に人の姿は殆んどなく
櫛葉梅雨後	^{かし} 櫛の葉が梅雨の後
無数点緑苔	沢山緑の苔の上に点在している

この詩も六合庵における静寂をうたったものと思われる。

小倉章蔵は、74歳を迎えたときつぎのうたを作って墨書した。

わしや もつと
ながいき
しますぞ
良寛さま
あなたと おなじ
としにはなつたが
七十四 蓮雨



章蔵書 草門之詩

このうたのなかには、長年にわたって慕って来た良寛への親しいおもいがあらわされている。小倉章蔵にとって良寛は、遠い昔の人ではなく、求道の旅路の身近な伴侶であったことを物語っている。

20年にわたる良寛の修行とは比ぶべくもないが、章蔵も、中津、徳島などの九州、四国における遍歴を経て、久々に故郷、高梁に帰って感慨深いものがあった。誰しもふるさとの山河には、いうにいわれぬ郷愁を覚える。彼が帰省したときに友人藤岡晴次のつぎの書にあわせてえがいた軸がある。

梁川流千古不尽卧牛

緑悠久不変此間亭

生五十年唯吾正気

伴山河

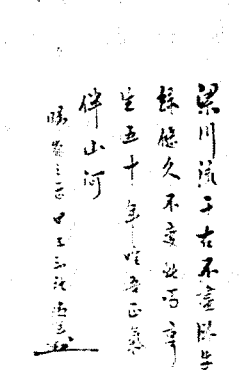
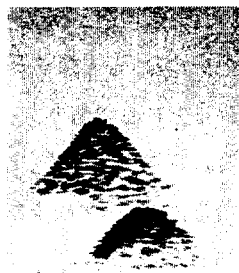
帰省之感甲子初秋晴次藤

23)
章蔵画

キリスト者としての吟味

小倉章蔵が1943（昭和18）年夏に高知に招かれ、土佐教会の修養会で講演した記録がある。彼はそこで良寛について話しをしている。まず、良寛の伝記を省み、その足跡を辿ったのち、彼が良寛の生きざまに学んだ点をあげ、その結びにこうのべている。

以上良寛の生活と詩とについて、申し上げましたが、其の学ぶべきところ内省と落付き堅き意思、



この非常時にのろまな話をした様ですが、私には時事問題は話せませんのと、この忙しい世の中にお茶が流行するのと同じく閑寂な気分を養い総親和総努力で銃後の美しさをしっかり完成したい。

私には、人様に何も申し上ぐる程の価値なく皆様と共に味って見たい、私は修養の道程にあるもので終生修養に志し人生の幕を閉じた時、安らかに眠り、ああ善かつ忠なる奴になりたい念願でございます。

小倉章蔵が良寛についての話しをしたのは、戦争が熾烈となっていた1943（昭和18）年の夏であった。すべてが、戦争遂行のために統制され、精神面では「国民精神総動員」と称して、国家目的のために結集され、それ以外のものは非国民として排除された時代であった。その当時は、天皇を現人神とする軍国主義的国家権力が至上のものとしておかれ、一部の隙も許されない総動員体制がしかれていた時代であった。そうした中で、良寛の生涯をふり返ってこころのゆとりを説いた小倉章蔵のおもいは何処にあったのであろうか。彼の立場は、反戦をとなえたり、当時の体制に反抗したりするには、あまりにも穏かなものであったし、国家主義的な体制を批判する視点を欠落していた。しかし、その中で聖書を読み、良寛の生涯を辿り、閑寂な気分を養っていた。それが緊迫した時代における彼のたのしみでありゆとりであり、それを通して、彼はすさみがちな自らの心をととのえていたといってもよい。戦争中にあっても、こぶしをふりあげていきりたつこともなく、むしろ淡々と古人を偲び、その生涯に学びながら真実を求めていた一人の人間のいたことを知らされるのである。

右の講演で小倉章蔵は良寛の生涯を辿ったのち、良寛に学ぶところとしてつぎのような諸点をあげ、聖書の教訓と対比している。

恬淡な生き方

近親の扶養も受けず、破れ墨衣に寒さをふせぎ、薄い粥に飢をしのぐ。ただ一枚しかない古蒲団を盗人にやって、窓にさし入る月を眺めて

盗人のとり残したる窓の月

とうたった。イエスは、山上の垂訓において「下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい。

1マイル行かせようとするなら、その人と共に2マイル行きなさい」(マタイ 5・40—41) といった。

また、「盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい」(マタイ 6・20) ということばもある。

春秋は一つの鉢を擁して托鉢に出たが、

「飯乞ふと わが来しかとも春の野に

堇つみつゝ 時をへにけり」

「みちのべの 堇つみつゝ 鉢の子を

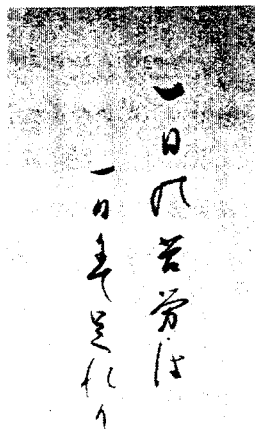
忘れてぞ来しその鉢の子を」

とうたい、衣服、金銭を与ふる人があれば辞せずしてこれを受け、路に凍餒〔^{とうたい}飢えること〕のものにあえば、それらを与えた。(小倉章蔵草稿より)

良寛が天道に自らの命運を托して淡々と生きたことを覚え、章蔵もキリスト者として、山上の垂訓の教えを想起している。彼の愛唱の聖句の一つで、つぎのことばであった。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであ

ろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」(マタイ 6・33—34)



本論文のおわりにかかげた四点のカラー作品は、小倉章蔵が、土佐で良寛の

話しをしたころ（1943年）当時の若い受講生の手帖にかいたものである。

小倉章蔵は、良寛が子供とよく遊んだことに注目し、良寛の左のうたを引用している。

霞立つ ^{かすみた}ながき春日を 子供らと
手まりつきつつ 今日もくらしつ

彼は、子供たちが、自分たちと遊ぶ良寛の誠実さを敏感に感得していたことをつぎのように指摘している。

年の非常に隔った者を子供が友達にするといふことは、子供は敏感に其人の誠実さを看破するからである。子供は何によつて之を看破するかといへば、相手の目を見る。目偽りなきを見出すと直に友達にする。

小倉章蔵は、ここでイエスが傍にやってきた子供たちを祝福した聖書の記事を引用する。

そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」。するとイエスは幼な子と呼ばせ、彼らのまん中に立たせて言われた、「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。（マタイ18・1—5）

幼児が聖書において高く評価されているのは、その能力によるのではなく、純真さにあるのでもなく、むしろ、小さな存在として何ら自らを高しとしない

者をうけいれる恵みによるのである。章蔵は、長坂鑒次郎が注目したように、良寛が「貧道の好まないものが三つある」とし、「詩人の詩と書家の書と、料理人の料理」とのべたことを銘記している。

良寛の幾多の詩歌の中でも、その核心となっている詩を吟味してみよう。

生涯懶立身	生涯、身を立つるに懶く ^{ものう}
騰々任天真	騰々、天真に任す ^{まか}
囊中三升米	囊中、三升の米
爐邊一束薪	炉辺、一束の薪 ^{たきぎ}
誰問迷悟跡	誰か問はん、迷悟の跡
何知名利塵	何ぞ知らん、名利の塵
夜雨草庵裡	夜雨、草庵の裡 ^{うち}
雙脚等閒伸	双脚、等間に伸ばす

この詩は、良寛のこころを知る上で重要なものであるから、吉野秀雄による現代語訳を記しておくことにする。

世の中に身を立てて、何事かを仕出かすといふことがいやで、ぼんやりとして、あるがままの天然自然の真理に、自分に任せきつてある。頭陀袋の中には托鉢でえた三升の米があり、囲炉裏のそばには一たばの燃し木がある。米と燃し木、この外に何が要らうか。迷ひだ、悟りだといふやうなことは、もはや自分にはどうでもいい世界だし、まして名譽や利益など、自分の関^{かか}はり知つたことではない。夜の雨ふる静かな庵の内に、二本の足を所在なく伸²⁴⁾ばしてゐるだけだ。

自らを懶^{ものう}い存在とし、こざかしこい人の知識や能力をたよりにせず、天真に

^{ゆだ}委ねて淡々と生きようとした良寛の心情がよくあらわれている。己を知り、砕けたおもいをもって天真にかえる道は、東西に呼応する真理である。小倉章蔵がさきの講演で引用している詩がある。

金羈遊俠子	^{キンキ} 金羈の遊俠子
志気何揚々	志気何ぞ揚々たる
維馬垂揚下	馬を ^{つな} 維ぐ垂揚の下
結客少年場	客と結ぶ少年の場
一朝千金盡	一朝千金尽き
轆軻孰復傷	^{かん か たれ またいた} 轆軻孰か復傷まん
婦来問舊閭	婦り来つて旧閭を問へば
歳寒四壁荒	歳寒うして ^{しへき} 四壁荒れたり

美しいたずなをつけた高価な馬にまたがって、意気揚々と遊びに出かけたものの、一朝にして千金を費いはたした上に、さまざまな不幸にあって痛手をうけ、ようやく故郷にたどりついてみると、家は老朽し四方の壁も破れて荒れていた。小倉章蔵はこの詩を引用し、青年の生き方の糧とすべきことを説いている。

なおこの詩の意味するところと、放蕩息子の物語の語るところには共通点がある。両者とも、奔放な青年の放蕩を扱っている。しかし、一方は、故郷は荒れはてて誰も迎えるものがなかったのに対し、放蕩息子の物語においては、帰還した息子をかき抱いて迎える父のいた点が相違している。小倉章蔵も良寛のうたをよみそれに共鳴しながら、自らのキリスト教信仰に根ざした表現を付記していることがある。その一つの例をあげておく。

「良寛が

何故に世をすてしぞとをり〜は

ところに恥ぢよすみぞめの袖」

と詠んだ歌を想起し、「彼は一路ただ自己の遁世の意義の完成に向って精進した」とのべ、

「吾人は

何故に世に生れしぞをり〜は

心に恥じよ神の恵みに

といひたい」と語り

このごろの恋しきものは浜べなる

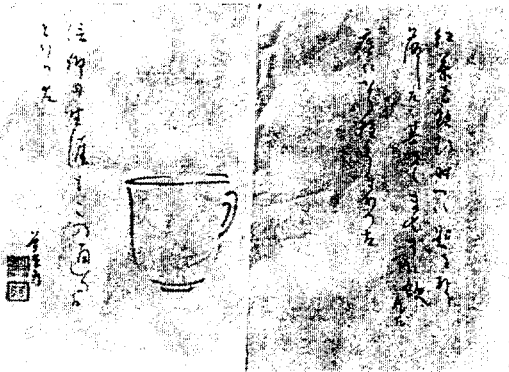
さざえの殻のふたにぞありける

の一首を添えている。

晩 年

小倉章蔵は、生れ故郷高梁で晩年をすごした。孫たちとの団欒をたのしみ、高梁教会の信徒として、淡々と奉仕をつとめ、交りを楽しんでいた。また近隣各地の知友たちとの交遊を大切にし、招かれれば、腰に書画の道具をいれた袋をさげてどこへでも出掛け、請われるままに作品を製作して楽しんでいた。作品は、水墨画、書、それに竹に蘭や菊を刻んで茶合を作るなど多岐にわたっていた。仏教の指導者たちとも交流があり、その作品の愛好者たちは、倉敷から北備の地域一帯に及んでいた。

小倉章蔵は、1964（昭和39）年9月19日、高梁の家で永眠、80歳であった。葬儀は、9月21日高梁教会で井殿園牧師の司式によって行われ、教会を代表して桑内成郎が追悼の辞をのべた。



小倉章蔵筆 紅茶を飲む時

彼の晩年の作の一つに、つぎの作品がある。それは、彼の晩年のおもいをよくあらわしていると思う。

紅茶を飲む時、つい匙を取り
落した。其まゝ混ぜずに飲んだ
底になる程うまかつた

信仰の生涯もこの通りだ
といった

蓮雨
□□

- 1) 魚木忠一、『日本基督教の精神的伝統』基督思想叢書刊行会、昭和16年。
- 2) 同上書、4頁。
- 3) 魚木忠一編、難波宣太郎著『木月遺稿』木月遺稿刊行会、1954年、165頁。
- 4) 西八條敬洪・本井康博、『長岡教会百年史』、1988年、96頁。
- 5) 本井康博編、『写真で見る新潟教会の歩み、1886—1986』日本キリスト教団新潟教会、65頁。
- 6) 藤井慧真『西福寺史』一越後本派本願寺一班、百萃苑、119頁—121頁 昭和43年、なおこの資料を著者に紹介されたのは与板の石黒秀一氏であり、記して謝意を表したい。
- 7) 『新島襄全集』第4巻、1989年、290頁以下。
- 8) 石黒秀一「良寛を敬慕したキリスト者」『良寛』第165号、1989年。
- 9) 大島清作『良寛全集』岩波書店、昭和4年、参考文献に大宮季貞『良寛詩集』がある。井本農一、岡克己校註『良寛歌集』（角川文庫）昭和34年には、大宮季貞『沙門良寛和歌集』（季本）として参考書の中に含まれている。
- 10) 大宮季貞は1910（明治43）年10月5日、神戸教会において開かれた、第26回日本組合基督教会総会において按手札をうけている。
- 11) 同上書、序文3頁—4頁。
- 12) 大宮季貞編『沙門良寛詩集』序文5頁。
- 13) 大宮季貞編『沙門良寛詩集』序文1頁—2頁。
- 14) 同書、序文3頁。
- 15) 谷川敏明編著、『良寛全集別巻Ⅰ、良寛伝記・年譜・文献目録』良寛全集刊行会、野島出版、昭和56年、603頁。
- 16) 大宮季貞『沙門良寛和歌集』、序文、6頁—8頁。

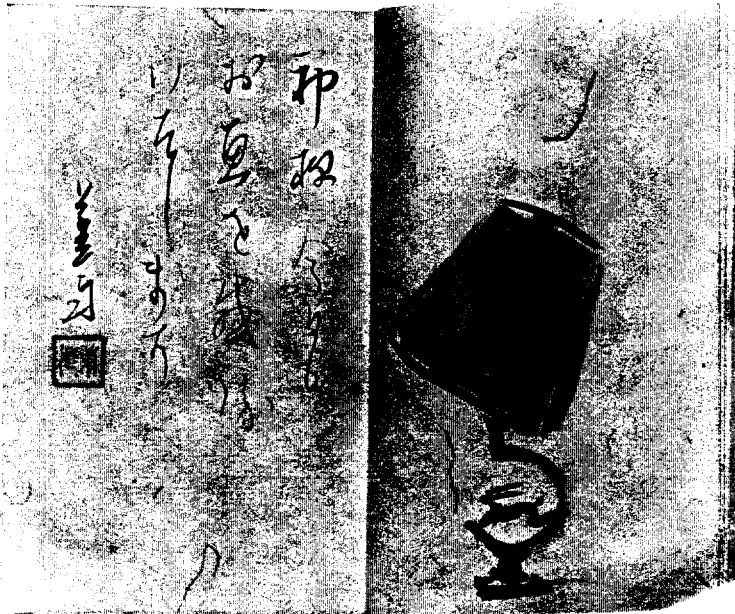
- 17) 良寛研究者の一人である唐木順三は「私は良寛の草体の書に接しても殆ど読めない。読解しようとする心をすぐさまに擲げてしまう程に読めない」としている。唐木順三『良寛』筑摩書房、昭和58年（第11刷）、256頁。
- 18) 森脇正之『円通寺の今と昔―玉島の良寛遺跡案内』倉敷文庫刊行会、大宮の「毛毯歌」献納は石黒秀一氏に御教示いただいた。
- 19) 森脇正之、『玉島の良寛遺跡案内』倉敷文庫、66頁。
- 20) 相馬御風、『良寛坊物語』春秋社、昭和3年、川本農一・岡克己、『良寛歌集』角川文庫、昭和34年、関克己『良寛』アテネ文庫、弘文堂、昭和31年。
- 21) 関克己『良寛』アテネ文庫、57頁―58頁。
- 22) 唐木順三『良寛』191頁以下。
- 23) この作品の年代からいうと甲子とあるので1924（大正13）年となる。この詩を作った藤岡清次は小倉章蔵の友人で高梁中学の一年先輩で海軍の軍人であった。
- 24) 吉野秀雄『良寛和尚の人と歌』、彌生書房、昭和47年、38頁。

神様 今日も

お恵を感謝

いたします

菫雨□



信仰に

土佐の

にんにくで

力づけ

堇雨□





よい梅干は

よく干して

気をつけ

雨にあわせない様に

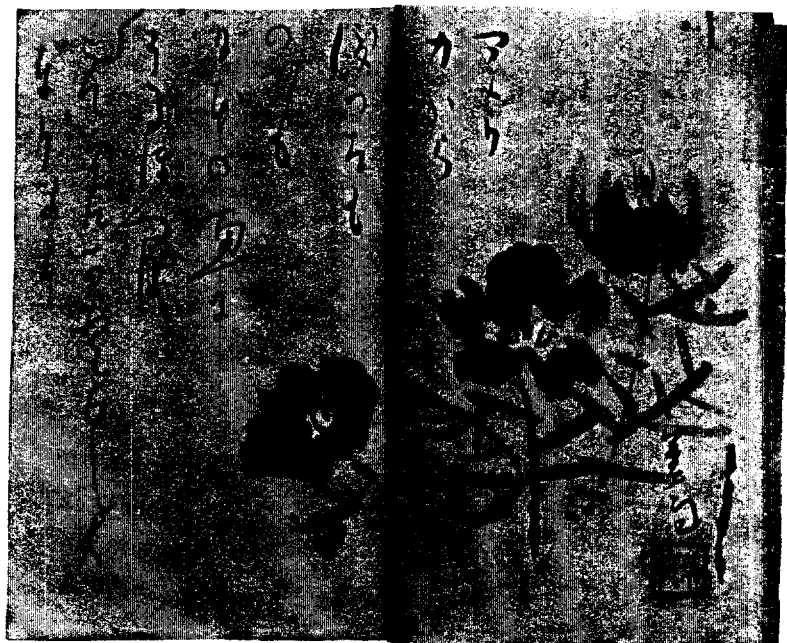
せねばなりません

干したりぬらしたりは

禁物です

信仰ものです

堇雨 □



堇雨□

アメリカ

から

渡ったものでも

日本の恵に

うるほへば

こんなに

可愛らしく

なります